

国王の受難

デルフィニア戦記外伝4

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
沖麻実也

目次

王女誕生までの七日間	5
鷹は翔んでいく	57
国王の女難	101
男の修行	149
嵐の後	205
あとがき	220



王女誕生までの七日間



国王の劇的な王座奪還からまもなく、さらなる激震がコーラル城を襲った。

国王が「養女を取る」と言い出したのだ。

血のつながりのない娘を、デルフィニアの王女にすると言うのである。

無論、前例のないことだ。

多少なりとも王家に連なる血筋の娘ならまだしも、生まれも素性もわからない娘である。

しかも、デルフィニア人でもない。

城内は大混乱に陥った。

陛下は何を血迷ったのかと嘆く声が多かったのは当然だ。

ただ、意外にも、国王のこの爆弾発言に諸手を挙げて賛同——とまでは言わないにしても、控えめに容認する人も少なくなかったのだ。

その筆頭が女官長のカリンである。

今このコーラル城に住む王族の女性はいない。

従って後宮も空だったが、さっそく部下の侍女にあれこれと指示を出し、若い娘にふさわしい部屋を整えさせると、山賊のような身なりの少女に丁寧な話しかけた。

「奥棟にお部屋をご用意致しました」

「え？」

少女はきよとなった。

王宮に滞在するようになって何日か経っているが、彼女は今まで本宮の中で寝起きたことはない。

暖かい季節でもあるので、山の中で野宿していた。食事も同様である。本宮の壮麗な食堂に顔を出したことは一度もない。

何しろ大勢の人がいるコーラル城だから、二の郭にも三の郭にも食べ物を出す場所には事欠かない。

三の郭のラモナ騎士団の官舎に混ぜてもらったり、一般兵士たちの食堂に紛れ込んだりしていたらしい。黄金の髪を隠してしまうと、少女は小者のように

見える。唯一、腰の大剣が小者にしては不相応だが、布でくるんで背中に負い、目立たないようにしているらしい。

そうした事情を、カリンは既に、部下の侍女から耳にしていた。今まではかまわずにいたが、国王が『養女にする』と宣言した以上、この少女の扱いをさつそくあらためなくてはと思ったようだった。

「我が国の王女となる方に野宿などさせられません。——どうぞ、こちらへ」

少女は釈然としない顔だったが、肩をすくめて、おとなしくカリンについて行った。

城内を好き勝手に歩き回っている少女も、奥棟へ入るのはこれが初めてだ。

どこの国の城にも言えることだが、表部分は男たちが働く施政の場であり、来客を迎える公式の場だ。対して奥向きは、王妃やその子どもたちが暮らす、国王の私的な住居である。

少女は廊下を歩きながら、珍しそうに^{あた}辺りを見渡

していた。

表部分とはかなり雰囲気が違う。

コーラル城は、少女が今までこの世界で見えてきたどの建物よりも立派な建物だった。

特に表部分は、堂々たる風格を感じさせる壮麗な宮殿だが、この辺りにくると、豪華さは同じでも、柱のつくりや天井の装飾にずいぶん優しい意匠^{いしょう}が使われている。

女官長は一室の前で足を止めた。

「こちらでございます」

そこには二人の侍女が控^{ひか}えていて、少女のためにわざわざ扉を開けてくれた。

中はいくつかの部屋に分かれていた。

広い居間と小さな部屋、それから寝室である。

居間の床は寄せ木細工で、色鮮やかな絨毯^{じゅうたん}が敷かれ、壁紙は小花模様、赤と金の絹地を張った肘掛^{ひじか}け椅子、優美な曲線を描く飾り棚や螺鈿^{らでん}の机などが置かれている。

小さい部屋は明かり取りの窓が大きく取つてあり、立派なつやつやした書き物机と書物を置く読書台があった。

最後の寢室を覗くと、これまた可愛らしい。

青地に金の星を散らした壁紙が使われ、分厚く織られた絨毯の上に置かれた寢台は天蓋付きで、白い薄絹が垂れ下がっている。

ふかふかの寢台を何とも言えない顔で見つめると、少女は深いため息を吐いた。

「ここで、寝るの？ ぼくが？」

「はい」

「おちつかないよ。——女の子の部屋だよね？」

「当然でございます。姫さまのお住まいですから」

少女は怒るより呆れるより、困惑を隠せない。

知りあつてからほんの十日あまりに過ぎないが、カリンは最初から素性の知れない自分のことを妙に尊重して、敬意を払ってくれていたように思う。

それにしても、早くも『姫さま』と呼んでくる。

これにはさすがに驚いた。意外でもあったので、その困惑と疑問を素直に女官長にぶつけてみた。

「ウォルの言つたこと、本気にしてるの？」

「陛下は冗談でこのようなことを言い出される方はございません」

少女はものすごく疑わしげな顔になった。

(どこからどう聞いても冗談にしか聞こえない……)

と、その顔は訴えている。

「おまえを俺の養女にする」という男の発言には仰天した。

言つた本人はまだ二十四歳の若者で、妻もいないとなれば「ふざけてるのか？」と言われても当然の状況である。

それ以前に、その男が曲がりなりにも『国王』という肩書きを持つことが大問題だった。

少女は人の社会の理や掟にはまったくと言っていいほど無頓着で、規律に縛られる気もなかった

が、そんな彼女にも、国王というものは、多少は（あくまで多少ではあるが）特別に扱われて然るべき存在ではないかという意識くらいはある。

何より、王女というものは（普通は）国王と血のつながった実の娘でなければならぬはずだという知識もある。

嘆かわしげに金の頭を振りつつ、寝室から居間に戻ったが、室内に腰を下ろそうとはせずに言った。

「そんなに簡単に認めていいことじゃないと思うよ。ぼくはこの国の人たちから見れば、どこの馬の骨ともわからない、単なるよそ者なんじゃないの？」

冷静に指摘する少女に、女官長は笑みを浮かべた。

この異国の少女は国王の提案を、単純に「困ったことになった」としか認識していない。

そのことに、あらためて感心させられたのだ。

少女は知らない。

普通なら——少なくともこの世界の普通の娘が、

こんな提案をされたとしたら、反応は二つしかない。

降って湧いた幸運に狂喜乱舞するか、予想を超えた事態に恐れをなして震えあがるか、そのどちらかしかないのだ。

貴族階級の娘なら前者、庶民階級の娘なら後者が多いだろうと女官長は思っている。

ところが、この少女はどちらにも該当しない。

ただひたすら面倒なことになったと、そんな厄介ごとは避けたいと苦々しく思っている。

もう一人、似たような状況に置かれながら、まったく同じ反応を示した人を女官長は知っていた。

懐かしささえ覚えながら、微笑して言った。

「二年前の陛下もそのように言われておりました」

田舎貴族の小せがれに王冠を与えるなどとてもないと、もつての外だと、この城の者はほとんどがあの男の即位に反対したのだ。

当の本人も、王冠など欲しくないという態度を隠そうともしなかった。

少女はその当時の男の様子は知らないが、容易に

想像できて、微笑を浮かべかけた。

それを引っこめて言う。

「ウォルの場合は前の王さまの落とし胤だぶつていう申し分ない理由があるじゃないか。だったら、田舎育ちだったとしても、王冠を受け取っても、ちつともおかしくないよ」

「それなら、あなたは、その陛下が見込んだ方です。少しもおかしくはございません」

きっぱりと言いつ返されて、少女は絶望的な表情で華麗な天井を仰ぎ、首を戻して女官長を見た。

幼くして命を奪われた我が息子と、国王の生母の仇かたきを取るため、この人は二人の死にまつわる謎を、二十年以上もの間、己の胸一つに納めて誰にも洩もらさなかつた。

その上で王宮の人々の言動を——本当に信用できる人間は誰か、疑わしい者は誰なのか、じっくりと冷静に観察して、識別していた人だ。

見た目は小柄こがらでふくよかな中年の婦人であっても、

その肝きまの据わり具合は並大抵のものではない。

なまじの男を遥はるかに凌駕りやうがしている。

そんな人が率先して男の提案を認め、素性の知れない娘を自国の王女として受け入れると言うのだ。

「女官長は、ぼくが王女さまなんかなっても……ほんとにそれでいいの？」

困惑の表情で尋ねる少女に、女官長は微笑した。

「善し悪しを問うても始まりません。それが陛下のご意思なのですから」

「そこだよ。王さまがこんな無茶を言い出したら、普通は女官長が真っ先に反対して、やめさせなきゃいけないんじゃないの？ ウォルのお母さん代わりなんでしょ」

少女の口調には男を心配する響きまであったので、コーラル城の女傑じょけつは困ったような笑みを浮かべた。

「確かに……国王が養子を取るなど、前例がございません。率直に申しあげるなら、お止めしたい気持ちがあつたかたくないわけではございません。あなたは

陛下と親子になつても、陛下をお名前前で呼ぶことをやめないでしようから」

「よくわかつてゐるじゃない。フェルナン伯爵が言つてたよ。陛下を呼び捨てにしてはならんつて」

その人の名前を聞いた女官長は急に真剣な表情で身を乗り出し、恐ろしいような口調で尋ねた。

「あなたは、伯爵さまのその諫言かんげんを受けて、なんとお答えになりましたか？」

「あいにく、ぼくは友達の名前で呼ぶ主義なんだから言つたよ。だいぶ文句を言われたけど。伯爵は、

最後には納得してくれてたと思いたいな」

「もちろん、納得してくださいましたとも」

力強く頷うなずいて、女官長は何とも言えない表情を浮かべて、国王軍の勝利の女神となつた少女を見た。

「ドラ將軍さまから伺うかがいました。あなたの計らいで、陛下は最後にフェルナン伯爵さまにお会いすることができたよ」

少女も寶石のような緑の瞳ひとみで、黙つて女官長を見

返した。

この人は伯爵の死を自分のせいだと思つてゐる。

息子の仇を討ちたい一心で自分が口をつぐんでいたせいで、フェルナン伯爵は投獄され、あんな無残な死を迎へることになつてしまつたと、今も自責の念とらに囚とらわれている。

「その一事だけをとつても、あなたにはどれだけ感謝しても足らないくらいです。それに……」

女官長は声を低めて、そつと言つた。

「陛下はフェルナン伯爵さまのことを恐ろしく頑固がんこな方だと、しきりと嘆いていらつしゃいました。が、わたしから言わせていただければ、あのお二人はそつくりです。陛下はご承知のように、屈託くつたくのない快活な方でいらつしゃいますが、こうと決めたことに関してはたいへんに頑固なところがありません。一度言い出されたことを翻意ほんいされる方ではございません」

再び天を仰いだ少女だつた。

「つまり……反対するだけ無駄？」

女官長は真顔で頷いた。

「さようでございます」

「ぼくが言いたいのは、本当にそれでいいのかわかってことなただけ……」

「ですから、それは申しあげても無駄です。何より——」

さらりと流して、女官長は言葉を続けた。

「あなたはいずれ、この国を去る方だとお聞きしました」

「そうだよ」

この時の少女は、まさかこの先何年もこの世界で暮らすことになるとは夢にも思っていなかった。

今日までの日々でさえ、長いと思っていたくらいなのだ。

もし、あの男の王座奪還を果たさせるために——何らかの意思によって自分が（何の因果か、こんな姿に変えられて）この世界に送り込まれたとしたら、

あの男はその目的を見事に果たしたのである。

ならば、自分はもうお役御免のはずだ。今日明日にでも迎えがきてもおかしくないと思っていた。

「うまく説明できないけど、迎えがきたら、ぼくはこの世界からいなくなる。それは間違いない」

「でしたら、ものは考えようです。陛下がおっしゃるように、お迎えがくるまで、この城で王女として過ごしてもよいのではありませんか？ あくまで一時のことなのですから」

またしても、ため息を吐いた少女だった。

国王が国王なら臣下も臣下だ。真面目な顔をして、すごいことを言う。どうしてこんなに熱心なのかと訝しんでいると、カリンは以前にも増して切実な口調で言ってきた。

「なにとぞ、今しばらく、この城に留まってもらえませんかでしょうか。それと言いますのも……」

急に態度の変わった女官長に少女は瞬きして首を傾げたが、ふと窓の外に眼をやった。

「外で話さない？ いい天気だよ」

大きな窓はあつても、この続き部屋には、直接、庭に出られる扉はない。

二人はいったん、大理石の廊下に出ると、廊下の突き当たりの扉から、花盛りの美しい庭に出た。

低い花壇かだんと中腰程度の垣根の中を縫うように散歩道がつくられていて、辺りがすっかり見渡せる。

ここは奥棟専用の庭で、城の表部分からは入れないようになつてゐるらしい。

足を止めた少女は女官長を振り返つて言った。

「続きを聞くよ。ここなら誰も聞いてないから」

女官長はちよつと驚いて問い返した。

「先程は、誰かが聞いておりましたか？」

「うん。扉の陰に、二人かな？ 張り付いてた。ほかたちが部屋を出ようとしたもんだから、慌あわてて逃げたよ」

嘆息たんそくした女官長である。

「申し訳ない。わたしの部下に盗み聞きなどをする

者がいるとは、嘆かわしい限りです。——教育をし直さなくては」

「女官長がほくに何を話すか、どんな態度を取つてゐるのか、氣になつて仕方がないんじゃない？」

少女は氣分を害した様子もない。

明るい顔で笑つてゐる。

その様子を見て、女官長はあらためて言ったのだ。

「では、後程、あらためて皆の前であなを姫さまと呼び、膝ひざを折ることに致しましょう」

寶石のような緑の眼が訝しげに女官長を見た。

「……なんでそこまでするわけ？」

女官長は間髪を入れずに問い返した。

「養女のお話は、おいやですか？」

「うーん……。いやつていうか、いやなのは確かにそうなんだけど……」

言葉を探して、少女は少し考えた。

「不愉快ふゆかいとか許せないとかい意味の『いや』じゃないよ。違うか、一種の不快感には違ひないかな？」

なんて言うか、困ってるって言うのが一番近い」

「なぜ、お困りに？」

「第一に、ぼくにはちゃんと父親がいる。もう亡く
なつたけど。第二に、ウォルはこの国の王さまでし
よ？ その娘なら王女さまだ。どう考えても、ぼく
はそんな柄じゃないよ」

真面目くさつて言い、十三歳の少女は逆に尋ねた。

「女官長は、ぼくに養女の話を受けて欲しいの？」

「賛成は致しかねますが、そうです」

「——大賛成しているようにしか見えないんだけど、
そこはひとまず置くとして……どうして？」

ひとり言ひとりごとのような前半の言葉は無視して、女官長は
はつきりと答えた。

「それが陛下のお望みだからです」

対して、少女は悪戯いたずらっぽく笑っている。

「そんなに簡単に納得しちゃうって、本当にいいの
か。名前だけ親子になつたって、ぼくはウォルの
言うことを素直に聞いたりしないの？」

「わかつております」

充分、予想しているという表情で女官長は頷いた。
「あなたが陛下の意のままになる相手でしたら、陛
下は一言、この城に留まるようにとご命令すればよ
いだけです。ですが、それではあなたは決して従っ
てくれない。そのことを陛下はよくご存じなのでし
よう」

「……………」

「わたしからもお願い致します。陛下のためにも、
どうかこのお申し出を受けてはいただけませんか」

「なぜ？」

本当に不思議そうに、端的に訊きいてくる。

こういうところはごく当たり前の十三歳の少女の
ようだ。

「ペールゼンは倒した。ウォルはまた王さまになつ
た。万事めでたしめでたしじゃないか。ぼくはもう
必要ないよ」

ゆっくりと首を振った女官長だった。

「わたしには、陛下がなぜあなたを養女に言い出されたか、わかる気がするのです」

少女がくると緑の瞳を動かした。

その視線だけで、再び「なぜ？」と尋ねている。

女官長は——臣下として、滅多なことは言えない立場だが、声を低めて、思い切って言い出した。

「陛下は……お友達が欲しいのでしよう」

「それなら今はイヴンがいる。団長だつてナシアスだつてウォルが信頼しているたいせつな友達だよ」

「はい。わかつております。ただ、ラモナ騎士団長さまにもサヴォア公爵さまにも、陛下の幼なじみである親衛隊長さまでさえ、どうしても……わかちあえないものがあるのです」

少女はまた無言で女官長を見た。

それは何？ と問いかける顔だった。

女官長は適切な言葉を探して、おもむろに言ったのだ。

「ある日、突然、たった一人で、今までとはまった

く異なる環境に置かれることになった衝撃、否が応でもそこで生きていかなければならない孤独……とでも申せばよいのでしょうか」

今度は少女が真顔になつて女官長を見つめた。

確かにそれは、他の誰にもわからないことだった。

女官長は小さな頷きを返して、真摯に続けたのだ。

「陛下はお強い方です。わたしも及ばずながら、お力になる所存でおります。ですが、陛下のお気持ちに寄り添うことはわたしにはできません。他の誰にも、フェルナン伯爵さまが亡くなられた今となつては誰にも、あの方の置かれた立場や、真のお心持を理解することはできないでしょう」

「……………」

「あなたにならそれがわかるのではないかと。陛下の孤独を癒やすことができるのではないかと思うのです」

「名前を呼び捨てにしたり、頭をはいたりするこ
とで？」

さすがに言葉に詰まった女官長だった。

女官長の立場では、そんな行動を容認することはできないのだ。

だが、当の国王はそうした『無礼な』振る舞いをも含めて、この少女を望んでいる。

恐ろしく複雑な顔になり、決まり悪そうにそわそわしながらも、コーラル城の女将おかみさんはたくましい人だった。

思い切ったように身を乗り出して、ぎりぎりまで声を低めて、そつと囁ささやいた。

「あまり、強くはたかれるのは困ります……」

「大丈夫だよ。あいつ、頑丈だから」

ますます妙な顔になった女官長だが、臣下として言うべきことは言わねばならなかった。

「承知しております。ただ、体面というものもありますので——人前では、なるべく……」

「わかった」

今回の王座奪回劇の戦闘における功労者が異国の少女なら、政治における最大の功労者は間違いなく女官長である。

改革派の首魁しゅがいであったペールゼン侯爵を追い落とすことができたのは、ひとえに女官長一人の功績と言つても過言ではない。

もともと奥を仕切る女官たちの頂点に立っていた人だが、ここへきて女官長の発言権は急速に増している。

今では表部分で政務に当たる官僚たちも、女官長の意向を無視できない状況になっていると言つてもいくらいだ。

そんな人が早々に国王の爆弾発言を容認し、異国の少女を自国の王女として迎えるべく、部屋の準備を始めたのだから、官僚たちが激しく動揺したのは言うまでもない。

国王がその娘に恩義を感じているのは理解できる。娘の働きを讃たたえて、褒美ほうびを与えようというのかわ

かる。だからといって、何も養女にすることは無い。相手は若い娘だ。そんな面倒なことをしなくても、もつと簡単に娘の働きに報いる方法がある。

「陛下がそれほどその娘を傍に置いておきたいのであれば、一、二年、奥棟で飼った後で、行儀作法をしつけて寵姫に直せばよい。娘もきつとそれを喜ぶに違いない」

というのである。

それこそが若く美しい娘の唯一の使い道であり、他ならぬ娘自身もそうした扱いを望んでいるに違いないと固く信じる人々は、果敢にも自分たちのその意見を国王に直訴した。

ただし、最大級に丁寧な言い回しに変更して告げる配慮は忘れなかった。

「何分まだ幼い方ですので、急がれることもありま
すまい。今しばらくご成長されるのを待ってから、
ご寵愛されるのがよろしかろうと存じます。将来の
寵姫にする予定の娘として、奥に住居を用意され

ばよいのではないでしょうか」

提案した人々は、これぞ名案と思ひ込んでいたよ
うだが、聞かされた国王は呆れ返った。

「諸君らに忠告しておくが、あの娘の前では決して
それは言ってはならんぞ。身の安全は保証しかねる
からな」

「……何と仰せられますか？」

「あれは優しいからな、諸君らの命までは取らない
と思うが、半殺しにされるくらいは覚悟したほうが
いい」

国王はあくまで真顔で、懇々と、とんでもない思
い違いをしている人々に言い論じた。

「第一、寵姫候補などという暴言を浴びせて、あの
娘の機嫌を損ねてみる。あの娘のことだ。それこそ
この城を飛び出して、二度と戻ってこないこともあ
りうる。そんなことになったら、取り返しがつかん。
俺は俺の恩人を国外に追い払った責任と罪を諸君ら
に問い質した上、罰を与えなければならなくなる。

——だから、いいな？ 断じて言うなよ」

官僚たちには国王の言葉の半分も意味が理解できなかった。

デルフイニア国王の寵姫という、女なら誰でもありがたがり、望むに違いない最高の荣誉と身分を、あの娘は拒否する——と国王は言うのである。

彼らの信ずる世界の常識ではあり得ないことだ。

どこの馬の骨ともわからない娘を自国の王女に据えるなどとんでもない、そんな暴挙は万物の神もお許しにならないと考える至極しごくもつともな常識を持つ人々は、こぞつて国王の従弟いとこの下に押しかけた。

サヴォア公爵であるバルロが率先して反対してくれば、国王も思いとどまってくれるはずである、何としても陛下を説得していただきたく、声を大にして訴えた。

ところが、ノラ・バルロは女官長と同じく、賛成と明言はしないまでも、反対もしないという態度を取ったのである。

「我が国の国王は型破りな方だ。また一つ従兄あにうえの武勇伝が加わるだけと思えば、そう驚くことでもあるまい」

官僚たちが絶望的な表情になったのは言うまでもない。

「滅相もないことでございます！ 一度王女に据えてしまつたら、そう簡単に廃除はいじょはできません！」

「お願い致します！ 何とぞ、陛下にご諫言を！」
取り乱す官僚たちに、バルロは笑つて言つた。

「人に仕事を押しつけるのは感心せん。それは貴殿たちの役目のはずだぞ。国王が養女を迎えるなどあり得ない、血のつながらない娘を王女に据えるなど前代未聞でございますと、従兄あにうえ上に面と向かつて諫言すればいいだろうが」

官僚たちは真つ赤になつて猛然もうぜんと反発した。

「恐れながら、サヴォア公！」

「我々は口を酸すっぱくして申しあげました！ そればかりはおやめくださいと！ 前例がございません

と！」

バルロは笑いを噛み殺しながら、わざと尋ねた。

「それで？ 従兄上は何と言われた？」

官僚たちの表情が見事に苦渋に引きつった。

二十四歳の国王は彼らの諫言をもつともしなかったのだ。

馬耳東風と聞き流し、堂々と言い放った。

「前例がないなら、つくればよいではないか」

それを聞いて、バルロは高らかに笑ったのである。

「剛毅なことだ。いかにも従兄上らしいな」

「サヴォア公！ どうか真剣にお考えください！」

「余のことではございません！ 我が国の王位継承権にも関わる問題なのですぞ！」

必死の嘆願に、若い公爵は皮肉な笑みを浮かべた。

「言う相手が違うぞ。俺ではなく、まずは従兄上を説き伏せるべきだろう。その上で口添えをと言うなら俺としても考えなくてもないが、従兄上のご意思は固い。そこまで言われる以上、俺ごときの言葉で

翻意されるはずもない」

その国王によく似た、しかし遙かに猛々しい黒い眼差しで、バルロは周章狼狽する一同を鋭く睨め回したのである。

「忘れるなよ。従兄上は我が国の王だ。侵されざる君主だぞ。諸君らはその王に再び反旗を翻す気か？」

これには一同、飛び上がった。

何しろ、我が物顔で王宮を支配していた改革派が一掃され、コーラル市民は真の国王を歓喜とともに迎え入れ、長い間の混乱がやっと収束したばかりという状況である。

醜い陰謀をもって国王を陥れた改革派の残党と思われては一大事と焦ったのだろう。必死になつて弁明したものだ。

「と、と、とんでもない！」

「決してそのようなことは！ 誤解でございませぬ！」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。